

レキオスグループはこれらの5領域を中心に「事業を通じて地域の様々な社会課題を解決」すべく尽力して参ります。

住環境
支援事業

地域
支援事業

協創事業

総合
不動産事業

通信事業

最大の役割は入居者の「住まいを守ること」

お部屋探しをする誰もが希望する物件をスムーズに借りたいという想いと、安心してお部屋を貸したいという家主様の想いを同時に解決するサービスとして家賃債務保証をはじめました。そして最大の役割は入居者の「住まいを守る」こと。生活困窮の兆候ともいえる家賃滞納が起きた場合は、安定的な日常生活への立て直しを伴走します。



24時間365日の安心安全な暮らしを守る

水が出ない、電気が点かない、排水管が詰まった…日常生活を支えるライフラインのトラブルは迅速な対応が不可欠です。さらに、高齢者の見守りや子育ての不安に対する緊急通報など暮らしのSOSを早期に発見し支援につなげるために、レキオスホットライン24を通じて24時間365日「つながる安心」をお届けしています。



通信格差を解消し誰もが平等に学べる環境をつくる



情報通信が私たちの暮らしに欠かすことのできない生活基盤となる一方で、家庭の経済条件によりインターネットにアクセスできない子供たちにとっては、教育格差を広げ、将来的な所得格差にまで影響を及ぼします。それらを解決するために、無料でインターネットが利用できる「レキオス光レジデンス」を賃貸住宅市場へと広く普及させる他、県内発「レキオスマバイル」では低価格のモバイル通信サービスを提供する事で、家計の環境によって、受けられる教育が左右されることのない社会を実現しています。



どんな境遇の人でも自由に未来を描ける社会を

高齢者や障がい者、母子家庭に対して、「保証人が見つからない」「安心して住める住居が探せない」等の日常生活における自立支援や住替えのサポートを行っています。那覇市をはじめ、県内7市町からサポート事業を受託する他、地域の不動産団体や福祉事務所と連携して、児童養護施設卒園者を対象とした居住サポートにも取り組んでいます。



1986

● レキオスの前身である沖縄信用保証を創業

1996

● 不動産管理業開始

2002

● 「レキオス倶楽部」設立
レキオス少額短期保険の前身である
「レキオス倶楽部レキオス共済会」設立

2003

● 24時間緊急通報サービス
「レキオスホットライン24」業務開始

2007

● ブロードバンド・通信事業開始
「レキオス光レジデンス(旧レキオスBB)」販売

2008

● 行政支援スタート
那覇市より「居住サポート事業」受託開始
(後に、沖縄市・豊見城市・浦添市・名護市・糸満市・嘉手納町より事業受託)

2014

● 「嘉手納町営住宅」指定管理業務受託
(後に、浦添市・うるま市・那覇市より事業受託)

2015

● モバイル事業「レキオスマバイル」開始

2016

● 生前・遺品整理「リリーフ」業務開始
IoT賃貸マンション「Smart Class」リリース

2017

● 承継の窓口+think Cafeオープン

2018

● うるま市より「子どもの居場所づくり」事業を受託

2020

● 独自回線・通信方式
レキオスダイレクト・レキオスマートウェイリリース
MVNE事業・FVNE事業開始
日本全国へレキオスのインフラが広がる

2021

● 公益財団法人社会貢献支援財団主催
「第56回 社会貢献者表彰」受賞

2022

● 「那覇市営住宅」
指定管理業務受託

2023

● 外国人実習生スマホ利用支援
「J-SIM Powered by LEQUIOS mobile」
リリース

世代を超えてつながる子どもの居場所



指定管理物件である、うるま市営住宅・東山団地の集会所を活用する形で、子どもの居場所づくり「あじま一家」を設立。ここでは、食事提供の他、学習支援や生活指導を行いながら、子どもたちが家庭以外で安心して過ごせる居場所づくりに取り組んでいます。

地域コミュニティの再生を支援



浦添市、嘉手納町、うるま市、那覇市より公営住宅の指定管理業務を受託する。団地の集会場を活用し子供の貧困対策に向けた取組みとして子供の居場所づくり事業を手掛けるなど、団地コミュニティ機能の再生や自治体活動の活性化を支援しています。

レキオスの家賃債務保証で掲げる「救済と再生」というミッション

人生の基盤となる「住まい」を誰でも等しく確保できる社会を作りたいという想いから家賃債務保証をスタートし、お部屋を貸す側も借りる側も安心して賃貸契約を結べる社会を実現しています。そして、レキオスの家賃債務保証では「救済と再生」というミッションを持って日々、お客様の生活再建に向けて寄り添っています。

「教育」の持つ意味を考え、負の連鎖を断ち切りたい

2014年の冬、家賃滞納が3か月続く部屋を訪ねました。暮らしていたのは15歳の少女。既に電気もガスも止められていた。少女は離島から本島の高校に進学したが、学校は休みがちで部屋は友達のたまり場になっていました。

親は仕事で島外に出ており連絡がつかない。連絡を試みる一方で少女を食事に誘い、暮らしぶりや学校生活について尋ねると、少女は親元を離れた寂しさや料理、洗濯など全て1人でする生活に疲れ、学校に行く気力をなくしていました。「学校を辞めたい」と繰り返す少女に「高校だけは卒業しないと後悔するよ」。会う度に強い口調で諭し、本島に住む少女の兄を訪ねて就学を支えるよう説得しました。自宅に少女を泊めて、ご飯の作り方を教え、ケーキ店を営む友人に頼み込んで短期のアルバイトをさせた事もありました。

少女の生活を安定させるため、少女のおばと連絡を取りあって、本島内の親戚と同居できるよう転居の手続きを進めた。就学のための貸し付け制度の書類も揃えた。滞納分の家賃の精算後も定期的に連絡を取り、関わりを途絶えさせない様心掛けました。

転居後、少女は生活が落ち着き休まず登校するようになりました。高校3年生になってからも毎朝7時に家を出て十数キロ離れた高校に通う。当手を振り返って少女は「学校をやめたいって思ったけど、頑張つて学校に通ってみると楽しかった。あの時、隣にいてくれて良かった」と感謝の言葉を口にしていました。



家賃債務保証の最も重要な役割は「お客様の住まいを守る・失わせない事」



一人暮らしには広すぎるファミリータイプの部屋に入居中の高齢女性。当初は、中々お話をしてもらえませんでした。それでも足しげく通い続けると、徐々にご自身の事を話していただけるまでに。「亡き夫と巣立っていった子ども達と過ごした思い出が詰まった部屋なので引っ越ししたくないんだよね…。」ふと、目をやると、子どもの成長の記録を刻む柱のキズが。収入(年金)と不釣り合いな家賃のお部屋に無理をして住み続ける理由が判りました。そこからは、一緒に将来設計を立てていくうちに、気持ちの整理がついたのか、一人暮らしに適した間取りのお部屋へ引っ越し決断をされました。引っ越し後も「たまにはお茶でも飲みにおいでよ」とお声がけいただく関係性が今でも続いており、お客様の住まいを守る事ができた嬉しさと私たちの使命を実感しています。

おじあおばあが安心して暮らせる社会を創りたい

お客様に会うために石垣島へ赴き、ご自宅訪問すると、そこには一人暮らしをする高齢女性が。事情を聴くと、ご自身の入院費用を工面するうちに家賃の支払いサイクルが崩れてしまったそう。「人様に迷惑をかけているのが申し訳ない。長生きしてごめんね」と言われてしまい心が締め付けられました。「そんな事ないですよ」と励ましなが、一緒に支払い計画と生活再建への道筋を立てる事でようやく笑顔になってくれたのです。私たちの仕事は、お家賃の立て替えという側面だけでなく、お客様の人生に触れる大切な役割を担っています。だからこそ、お話を粘り強く聞いて「これからどうしようね、こうしようね」と、寄り添っていく。そういう、ひとつひとつの積み重ねから信頼関係が生まれると思っています。今後、ますます高齢化社会が深刻になる中で、家賃債務保証が担う社会的役割はますます重要になっていきます。

